芹谷遺跡で発見された石器

①濃飛流紋岩（のうひりゅうもんがん）や溶結凝灰岩をつかった石刃とナイフ形石器、彫器（芹谷遺跡の主体を占めるグループ）

②鉄石英（てつせきえい）や玉髄（ぎょくずい）をつかった２～3cm の小形のナイフ形石器

1　砺波のあけぼの

旧石器時代は、**打製石器**（だせいせっき）を使って狩りや採集をしていた時代です。まだ土器が発明される前のことです。人々は獲物を求めて移動し、簡単な小屋や岩かげなどに住み、火を使って暮らしていました。

砺波市は、約２万年前❶から人が住みはじめたようです。

市内では芹谷野段丘や庄東山地で、旧石器時代の石器が多く見つかっています。とくに栴檀野地区に遺跡が集中しており、芹谷遺跡（せりだに）、池原遺跡（いけのはら）、高沢島（たかざわじま）Ⅰ・Ⅱ遺跡などが知られています。

芹谷遺跡（せりだにいせき）

芹谷遺跡からは、これまでに畑の表面から 100 点以上の石器が見つかっています。その石器は大きく２つのグループにわけることができます。

ナイフ形石器は、動物の解体や毛皮の加工などに使われました。彫器は、骨や木の道具をつくるのに使われました。南砺市祖山（旧平村）からはナウマンゾウ❷の臼歯の化石が発見されています。当時の人々は、そうした動物を獲物にして生活していたのでしょう。

↑ナウマンゾウの模型
（富山市科学博物館）

❶２万年前は、地質年代でいうと更新世（洪積世）にあたります。氷河期だったので、海水面が今よりも低く、日本列島は大陸と陸続きになっていたと考えられます。

❷ナウマンゾウは、１万５千年前まで日本列島の各地に生息していましたが、絶滅してしまいました。化石は富山市大沢野町と南砺市平地域の２箇所で発見されています。